

日英語対照—— ‘go’, ‘come’, 「いく」, 「くる」の異同

村田 明

キーワード : NSM, 日英対照要旨

要旨

‘go’ と「いく」, ‘come’ と「くる」は代表的な日英対応語と一般的に考えられているが、意味上の微妙な差もある。まず、‘go’ と「いく」, ‘come’ と「くる」の使用例を文脈指定とともに調べ、次に、それぞれの意味をNSMによって記述する。NSMによって記述することによって‘go’ と「いく」, ‘come’ と「くる」のどの意味成分が同じでどの意味成分が異なるのかが浮かび上がってくる。

1. 目的

Goddard (1998) は意味を記述(説明)する際の重要な点をいくつかあげている。

- ・循環論的記述, 不明瞭な記述 [被定義語より複雑な概念構造をもつ語を使った記述] を避ける。
- ・説明する際に専門用語, 論理記号, 略号を使わずに, 「私」, 「あなた」, 「起こる」, 「思う」, 「知っている」, 「良い」, 「大きい」, 「～だから」のような日常よく使う自然な語を用いた単純な表現だけで説明する。
- ・説明は被定義表現のすべての中心的意味を忠実に記述していなければならない。
- ・説明を意味的に単純な語で表すことによって, その説明が言語横断的に明瞭に理解される(簡単に翻訳できる)ものでなければならない。

これらの点に注意して記述された意味は、例えば、辞書作成のような、ある単語のより明瞭な理解を得ることを目的とした作業をする場合に役立つばかりでなく、複数言語の対照研究においても、言語間の異同を浮き上がらせるのに役立つ。Goddard (1998) は、これらの点に注意して Wierzbicka によって提唱された Natural Semantic Metalanguage (以後NSMと略記。意味を論じるための自然な汎用言語) を用いて、感情、色彩、発話行為動詞といった基本語彙の意味記述を試みている。ここでは、‘go’, ‘come’, 「いく」, 「くる」を例にとって日英語の異同の記述を試みる。

2. go, 「いく」

人や動物がある場所から別の場所へ移動することを ‘go’ を使って表現するのは自然であるが、無生物に対して ‘go’ を使うのは不自然である。

- The boys are going down to the river.
- The horses are going down to the river.
- ?The clouds are going across the sky.
- *The rock is going down the hill.¹⁾

‘go’ は、Goddard がいうように、不定の位置語や疑問の位置語と結びつくとゴールを示すが、だからといってゴール表現が義務的に要求されるわけではない。

- (2) a. She went somewhere.
b. Where are you going?
c. She went yesterday.

(2c) を「彼女がどこかに到着した」を含意させずにいうことができる。

以上述べた特徴に留意して ‘go’ の N S M による意味記述をすれば次のようになる。

(3) X went (yesterday) =

この前に X はどこかにいた

X は他のところにいたかった。

そのために X はある時間 (昨日) 移動した

そのためにその後 X はその場所にはいなかった

X は他のところにいた²⁾

「いく」は ‘go’ と違って、主語が無生物であってもかまわない

- (4) a. 子どもたちが川を下っていく。
b. 馬が川を下っていく。
c. 雲が空を流れていく。
d. 岩が山を転がっていく。

従って、「いく」の N S M による意味記述では (3) X went の 2, 3 番目の意味成分が異なっていると考えられる。

(5) X が (昨日) いった =

この前に X はどこかにあった (いた)

X はある時間 (昨日) 移動した

そのためにその後 X はその場所には (い) なかった

X は他のところにあった (いた)

つまり、「いく」は、主語が無生物であってもかまわないので (3) の願望成分を欠いているのである。

しかし、ここで、(1)と(4)で使われている ‘go’ と「いく」のもう1つ大きな違いに注目すべきである。

(1)の ‘go’ は意味的主要動詞としての働きをなしているが、(4)の「いく」はいわゆる軽動詞であって、意味的主要動詞としての働きをなしていない。主動詞としての「いく」は ‘go’ と同様、無生物主語表現は不自然である。

- (6) a. ?雲が空をいく。
b. *岩が山を下へいく。

また、(4c), (4d) の英語対応表現は適切な意味的主要動詞を選ぶことによって可能である。

- (7) a. The clouds are flowing across the sky.
b. The rock is rolling down the hill.

このように、複数言語間の語彙の異同を調べる際には当該言語間の当該概念 (今の場合は移動動詞) の語彙の違いを常に念頭に入れておく必要がある。

「いく」の N S M による記述はこれまでの考察をまとめて次のようになる。

(8) a. 意味的主要動詞「いく」

Xが(昨日)いった＝
この前にXはどこかにいた
Xは他のところにいたかった。
そのためにXはある時間(昨日)移動した
そのためにその後Xはその場所にはいなかった
Xは他のところにいた

b. 軽動詞「いく」

Xが(昨日)いった＝
この前にXはどこかにあった(いた)
Xはある時間(昨日)移動した
そのためにその後Xはその場所には(い)なかった
Xは他のところにあった(いた)

'go' は to phrase を伴うと到着を含意するが、この点は、「いく」も同じである。

(9) a. ? She went to the shops but she hasn't got there yet.

b. ? 彼女はその店にいったがその店にはまだきていません。

この場合の 'go' および「いく」のNSM記述は次のようになる。

(10) X went from A to B (yesterday)＝

Xが(昨日) AからBへいった＝
この前にXは場所Aにいた
Xは他のところにいたかった
そのためにXはある時間(昨日)移動した³⁾
そのためにその後Xは場所Aにはいなかった
Xは場所Bにいた

軽動詞「いく」に有生主語の制限がないことはこの場合も同じである。

(11) a. 雲が西の空から東の空へ流れていった。

b. ? 雲が西の空から東の空へいった。

軽動詞「いく」の到着含意のMSM記述は次のようになる。

(12) Xが(昨日) AからBへいった＝

この前にXは場所Aにあった(いた)
そのためにXはある時間(昨日)移動した
そのためにその後Xは場所Aには(い)なかった
Xは場所Bにあった(いた)

3. 'come', 「くる」

'come' には目的地指向性がある。行為 'come' は目的地に到達するまでは完了されないが、行為 'go' は目的地と関わりなくおこなわれる。

(13) a. When did he come ?

b. When did he go ?

(13a) には目的地指向性があるので、これは、到着時間をたずねる疑問文である。それに対して、(13b)は到着時間ではなくて出発時間をたずねる疑問文である。この点は「いく」、「くる」も同じである。

(14) a. 彼はいつきましたか。

b. 彼はいつきましたか。

‘come’ は目的地を既知の情報として表現するので、たとえば、‘come’ を使った文で目的地をたずねることはできない。「くる」も同様で、「いく」の場合は目的地も出発点もたずねることができるが、「くる」を使った分で目的地をたずねるのは不自然である。

(15) a. ? Where did he come to ?⁴⁾

b. Where did he come from ?

c. ? 彼はどこへきたのか。

d. 彼はどこからきたのか。

(13)～(15)の例文に関して述べたことは‘come’と「くる」の共通特徴だけであったが、‘come’と「くる」の間には大きな違いがあって、この違いを調べることの方が‘come’と「くる」の研究にとっては重要である。‘come’の用法を調べるためには話者、聞き手、第3者の位置関係を細かく指定する必要がある。以下、Goddard (1998)に従って、状況指定と‘come’の用法について述べる。‘come’の方が、‘go’よりも適切であるもっともわかりやすい状況は、到着時点で話者が到達点にいる時である。たとえば、私が町のある店で働いていて、太郎が明日この店にくるつもりであることを私が知っているような場合、このことを私があなたに(16a)のように報告するのはかなり奇妙に聞こえる。

(16) a. Taro's going to the shop tomorrow.

b. Taro's coming to the shop tomorrow.

c. 太郎は明日店にいきます。

d. 太郎は明日店にきます。

(16b) のようにいうのが自然であり、このことは「いく」「くる」の場合も同様である。⁵⁾

話者が発話時に到達点にいる場合も‘go’より‘come’の方が望ましい。たとえば、私が店にいて電話であなたと話をしているような場合、たとえ私もあなたも、私が明日は店にはいないであろうと思っても、私はあなたに(16b, d) のようにいえる。

‘come’が「くる」と大きく異なるのは、いわゆる直示投射と呼ばれる現象においてである。直示投射というのは、話者が離れた位置に自らを想像的に投射させることである。直示投射の問題を考えるために、ある直示条件下における‘come’の用法を調べてみよう。私が働いていない店であなたが働いていて、到着時か発話時にあなたがその店にいる場合、私はあなたに(16b)のようにいえる。(16a)は、私があなたの居場所を知らないか、あるいは、あなたの居場所を気にしていない場合に使われるいい方である。「いく」「くる」の場合は、この状況下では、(16d)より(16c)の方が自然である。⁶⁾

ここで、Fillmore (1966, 1971, 1975) のいう、基盤地要因 (Home Base Factor) が関わっている状況を考えて、‘go’より‘come’の方を好んで使われることが多い。基盤地要因というのは目的地が文字通り家であったり、職場や自国である場合のことである。たとえば、私とあなたが同じ店で働いていて、仕事が終わって一緒に飲み屋で一杯やっているという状況下では、私もあなたも(17)のようにいえる。

(17) It's a pity Taro's coming to the shop tomorrow, when neither of us will be there.

(17) では、話者も聞き手も発話時および到着時のいずれにおいても問題の店にいないのにも関わらず ‘come’ が使える。これは、私たちではなくて Taro が私たちのどちらかが（あるいは両方が）明日店にいると考えているであろうという推量によって説明されるかもしれないが、この説明は次の例には有効ではない。

(18) It's a pity the Vice-Chancellor is coming to the Department tomorrow, when neither of us will be there.

the Vice-Chancellor が私たちのような下下の者に興味を持っていない状況であっても、この文の ‘come’ の使用は自然である。

基盤地要因は「くる」の場合も ‘come’ と同様に働く。

(19) a. 明日、我々がいないときに太郎が店にくるとは皮肉なことだ。

b. 明日、我々がいないときに社長が店にくるとは皮肉なことだ。

日頃まじめに働いている我々が、よりもよって10年ぶりに休暇をとった明日、社長が店の視察にくるなんて、この世は思い通りにはいかないな、と2人で飲み屋で愚痴をこぼしている状況で、(19b)の「くる」の使用は自然である。

話者も聞き手も関わっていない「第三者」文脈でも ‘come’, 「くる」が使われる場合がある。

(20) a. People come to America with all manner of hopes and dreams.

b. The thief came into her bedroom.⁷⁾

c. あらゆる種類の夢と希望を抱いて世界中から人々がアメリカにきます。

Fillmore (1975) は、(20a) は America が話の主題であり、話の主題は直示の中心 (deictic center) としたの機能をもてるので、直示の中心への移動であるから ‘come’ が使える、(20b) は中心人物の基盤地への移動であるから ‘come’ が使えると説明している。

N S Mによる ‘come’ の意味記述は (21) のようになる。

(21) X came to place-A (yesterday)=

この前にXはどこかにいた

Xは他のところにいたかった。

そのためにXはある時間移動した

そのためにその後Xはその場所(場所A)に(昨日)いた

その場所にいる誰かが「Xは私と同じ場所にいる」と思うであろう

‘come’ の意味は第3成分までゴール表現のない ‘go’ と同じであるが、‘come’ には目的地指向性があるので ‘come’ には第4成分が必ずある。

‘come’ と ‘go’ のさらに大きな違いが ‘come’ の第5成分に表されている。‘come’ の特別な特徴は、未指定の誰かが、「Xは私と同じ場所にいる」と思えるということである。この誰かというのは話者でも聞き手でも第三者であっても良い。例えば次の例を考えてみよう。

(22) Does Hanako know Taro's coming to the shop tomorrow?

話者も聞き手もその店とは特に何の関係もなく、発話時および到着時のいずれにおいてもその店にいない状況下で、(22)では、第5成分の「誰か」を hanako とすることによって ‘come’ の使用が容認される。これは「くる」にもいえることである。

(23) a. 花子は太郎が明日店にくることを知っているか。

b. 花子は太郎が明日店に行くことを知っているか。

問題の状況下では(23a)のようにいうのが自然で、(23b)も問題の状況下で可能な発言ではあるが、こちらの方は話者、聞き手、花子3人ともその店と何の関係もない場合にも使えるいい方である。

(20a, b, c)では、第5成分の「誰か」はそれぞれアメリカにいる人、彼女、アメリカにいる人ということで、やはり‘come’の使用が容認される。

‘come’と「くる」の使用で問題となるのはこれらの動詞が1人称主語をとる場合である。

(24) a. I'm coming to you.

b. (私は)あなたのところへきます。

c. (私は)あなたのところへいきます。

(24a)では第5成分を聞き手として‘come’が使用されている。⁸⁾(24b)は発話時に話者があなたと同じところにいるときに使われ、発話時に話者と聞き手が同じところにいるとき(例えば、電話での会話や手紙でのやりとり等)には(24c)が使われる。

AとBが同じ店で働いている状況下での次の会話を考えてみよう。

(25) A: 明日、店を休みたいんだけど、いいかな。

B: a. 心配するなよ、ぼくがくるから。

b. 心配するなよ、ぼくがいくから。

店での会話なら(25a)になり、飲み屋での会話なら(25b)になる。

以上の考察からNSMによる「くる」の記述は、(21)の‘come’の記述よりも少し複雑になる。

(26) Xが(昨日)場所Aにきた＝

Xが話者の場合、今XはAにいる。

この前にXはどこかにいた

Xは他のところにいたかった。

そのためにXはある時間移動した

そのためにその後Xはその場所(場所A)に(昨日)いた

その場所にいる誰かが「Xは私と同じ場所にいる」と思うであろう

‘come’と「くる」の決定的違いは、「くる」のNSM記述の第1成分にある。

(27) May I come in?

(27)に対応する表現を「くる」を使って表すことはできない。なぜならば「くる」の第1成分がすでに話者が中に入っていることを要求するからである。

【注】

- 1) 'go' は移動の意味に限っている。特に分詞形容詞 'gone' は有生物にも無生物にも同様に使えるので、ここでは除外されている。
 - i. It's gone.
 - ii. The rock was gone.
 - iii. The clouds were gone.
- 2) Xが他の場所に行きたいと思っても、それができない状況下（例えば金庫室に閉じ込められたような場合）では、いくらその中で体を移動させても 'X went.' とはいえないであろう。従って、「Xは他のところにいた」成分が必要である。
- 3) Goddard (1998) には (10) には 'X moved from A to B' の説明を構成する成分が含まれている、と述べられていて、'go' や「いく」を説明するのに「移動」という概念を使うことの問題は解決されている。
- 4) 目的地の複数候補地が既知情報として存在し、その中のどこへきたのかをたずねる場合には、(15a), (15c) は自然な疑問文である。
- 5) 同じ理由で i は自然だが、ii は変である。
 - i. Come here!
 - ii. Go here!
 - iii. ここへこい.
 - iv. ここへいけ.もちろん、地図を指し示しているような場合は、「ここ」は私の居場所ではないので ii, iv のいい方に問題はない。
- 6) 問題の状況下で、(16d) をいう場合もあるようであるが、1人称主語にするとかなり奇妙に聞こえる。
 - i. 私は明日店にいきます.
 - ii. ?? 私は明日店にきます.「くる」の場合1人称主語と3人称主語で直示投射の可能性にはっきりと差がある。
- 7) (20b) の日本語対応文はiのようになるであろう。
 - i. 泥棒が彼女の寝室に入ってきた.英語では主要動詞 'come' で表される表現が日本語では別の意味的主要動詞と軽動詞「くる」でより自然に表現される場合が多い。軽動詞「くる」の分析は本研究に間に合わなかつたので除外している。
- 8) 第5成分の「誰か」はXとは違う人物でなければ意味をなさないで、この場合第5成分はIではなくて you である。

【参考文献】

- Fillmore, Charles J. 1966 "Deictic Categories in the Semantics of COME," *Foundations of Language*, 2.
——— 1971 "Types of Lexical Information," In D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits (eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, and Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
——— 1975 *Santa Cruz Lectures on Deixis 1971*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club. Goddard, Cliff 1998 *Semantic Analysis: A Practical Introduction*. New York: Oxford University Press.